HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会第２回記念シンポジウム記録「良き文献学」と「悪しき文献学」，そしてメディア研究との接点
著者	柴田，崇；SHIBATA，Takashi
引用	北海学園大学人文論集(59)：27-37
発行日	2015-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

「良き文献学」と「悪しき文献学」，そしてメディア研究との接点

柴　田　　崇

はじめに

『人文学概論』についての簡単な感想を述べた後，同書に見られるＥ・サイードへ言及を補足，敷衍するところから，新人文主義の行方について提案致します。より具体的に言うと，同書ではサイードを引用しつつ「文献学への回帰」が新しい人文主義の起点になりうると書かれていますが，サイードは別の箇所では，ある種の文献学，または文献学的思考を強い調子で非難しています。つまり，サイードの思想からは，「良き文献学」とともに「悪しき文献学」が読み取れるわけです。両者の対照から文献学の「良さ」と「悪さ」を抽出した上で，メディア研究者の立場から，「良き文献学」を推し進めるための提言をします。キーワードは，三つの「テクスト」と，「コンテクスト」です。

０．感　　想

はじめに言わなければならないのは，『人文学概論』が極めてまれな著書だということです。まず，人文学部を名乗る学部や，実質的に人文学 humanities を理念に掲げる学部が数多くある一方，教育の基礎となる思想を一冊にまとめた本は見当たりません。「人文学」に含まれる領域を網羅する，あるいは網羅しようとする作業は，その困難さから敬遠されてきたと言えます。安酸敏眞による概論が出て，なおかつ多方面から好意的な反応があるのは，本学部のみならず人文学にかかわる本邦の学徒にとってまこ

とに喜ばしいことです。

メディア研究に従事する者としては,同書に「情報とメディア」(第 14 章)があることに特に注目しています。人文学の最大のツールである「本」は,コデックス（冊子）という歴史的存在です。本以前には別のメディアが知を支えていました。コデックスが人文学的知の生成と保存に貢献してきたのは確かです。しかし，コデックスが歴史的な存在である以上，それを不変の存在と見なすわけにはいきません。今日の発表の主題は，電子化が進むとともに,「良き文献学」がどう変わるべきなのか,「良き文献学」の特性を維持するためにはどのような発想の転換が有効かを考えるところにあります。「文献学への回帰」が単なる懐古趣味に陥らないためにどうすべきか，これが問題です。

本発表は，いわば,『人文学概論』の補遺を志向するものです。人文学なるものの広さと深さに思いをはせれば，これまで概論が出なかったのも頷けます。この意味で,『人文学概論』は野心的仕事です。ならば後に続く者は，いたずらにその欠損をあげつらうのではなく，それを補う作業にまず取り組むべきです。ここでの補遺とはそのような意味です。概論の示した広さに対し，各領域の専門家の深さを対置し，両者の往復で人文学なるものを規定し続けるのがよいと考えます。

1.「良き文献学」／「悪しき文献学」

冒頭に述べたように,『人文学概論』には人文学の展望の起点として文献学があがっています。以下，同書の称揚する「良き文献学」の要件を整理します。

第一の要件は「精読」です。

> 「ますます綿密に，そしてポワリエ (Richard Poirier) が提案するように，ますます注意深く，ますます幅広く，ますます受容性に富み，抵抗的に行われる読みの行為のみが，とくに，……人文主義の基盤が

変化した今，人文学にとって本質的な価値のある適切な訓練なのだ」（サイード『人文学と批評と使命』82 頁）（安酸，213 頁）

精読とは「言語が歴史のなかの人間によって使われるときの言葉やレトリックを，詳細に辛抱強く吟味すること」（サイード，82 頁）であり，文学テクストあるいは文献資料を精読することが，人文学の基礎であり生命線である（安酸，213 頁）

同書には，多読 extensive reading に対する精読 intensive reading の効用が「人文学の基礎であり生命線」だと，はっきり書かれています。

第二の要件は「脱ヨーロッパ中心主義」です。

「人文学とはかつては，古代ギリシャやローマ，ヘブライ文化の息吹を伝える古典テクストを研究することだった」（サイード，58 頁）のである。しかし「他の伝統についてもあまりにも多くのことが知られている今，人文学そのものがもっぱら西欧の実践だと信じることなど，とうていできはしない」（サイード，72 頁）（安酸，210-211 頁）

要するに，サイードの説く「新しい人文学」は，グローバルな視点に立脚し，テクスト ── 言語に忠実でありつつ，越境的，民主的，かつ現実批判的な性格をもった新しい形の人文学であり，それが具体的にいかなるものであるかは，『オリエンタリズム』をはじめとする彼自身の著作と言動が，これを最もよく証言している（安酸，212 頁）

人文学を奉ずる諸学部のなかで，本学部の特長をあげるとすれば，「新人文学」という明確な理念を提出している点です。同書には，「新しい」人文学をめぐる歴史が，その負の側面とともに書かれています（208 頁以下）。18 世紀後半のドイツで起きた「新人文主義」（Neuhumanismus）以外にも，1920 年代から 30 年代にかけてのアメリカでも「新人文主義」を標榜する運

動がありました。同書の引用は，サイードが後者の排外主義的，白人至上主義的性質を告発したことを指すものです。

上記の引用でも指摘されているように，サイードの説く「新しい人文主義」の姿を捉えるには，まずは『オリエンタリズム』を読むべきでしょう。そこで『オリエンタリズム』を読んでみると，そこには「良き文献学」ではなく，主に「悪しき文献学」の有様が書かれています。端的に言えば，『オリエンタリズム』は，「良き文献学」を明示する本ではなく，「悪しき文献学」を告発する本なのです。

> 人間的なものと直接に遭遇して方向性を見失うよりも，むしろ書物 text の図式的な権威によりかかろうとするのは，人間に通有の欠点であるように見受けられる（サイード，94頁）

> そしてもっとも重要なことは，こうしたテクストが，たんに知識だけではなく，そのテクストが叙述しているかに見える当の現実をさえも創造することができるという点である。やがて，こうした知識と現実とは，一種の伝統を，つまりミシェル・フーコーが言説 discourse と呼ぶところのものを生み出すことになる（サイード，95頁）

『オリエンタリズム』の成果は，表象，とりわけ西洋世界が東洋に対して抱く表象がつくりだす権力構造を剔抉したところにありました。この権力構造の構築の最大の功労者が，ある種の文献学者でした。

> オリエンタリストは誰もほぼ例外なく，まず文献学者として出発した（サイード，99頁）

サイードが「文献学者」の代表に名指すのは，Ｓ・ド・サシーや，Ｅ・ルナンです。サイードによれば，前者は，「歴史一覧表 *tableau historique*」の作成という主題を設定し，オリエントに関するテクストの規範化の流れを

つくりました。後者は，この流れの体系化と制度化に貢献しました。

こうしてできた「文献学」の性質を顕著にあらわした一文が，ルナンの著書にあります。

> 「文献学とは精神的事物を対象とする精密科学である。文献学の人文諸科学に対する関係は，物体に関する哲学的諸科学に対する物理学および化学の関係と同様である」（サイード，136 頁＝Renan, *L'Avenire de la science*）

サイードは，上記の意味の「科学性」を志向する学を，「文献学的実験室 philological laboratory」（サイード，148 頁）と呼び，批判します。

> 論理的に構築され，オリエントと名付けられたその領域のなかでは，ある種の断定はすべて同一の力学的一般性と文化的有効性とをもってなされることが可能だった。（中略）人間は，文化の落とし子などではなかったのである（サイード，150 頁）

批判の要諦が，一般法則を追求するあまり文化へのまなざしを失い，自閉したシステム，あるいは脱コンテクスト化したテクストの中で対象を捉えようとする姿勢にあることが分かります。

この「悪しき文献学」からは，精読によっては抜け出せません。

この陥穽，つまり知の権力構造は，一般法則定立の誘惑に駆られた著者，権威的テクスト，そして無批判な読者によって構築されると言い換えられるでしょう。そこで，「良き文献学」の要件の三つ目として，「悪しき文献学」を回避することを付け加えたいと思います。精読の局面について言えば，第一に，「規範」や「古典」となったテクストを吟味をしつつ読むこと，第二に，自らが「言説」のポリティクス，あるいは「文化の落とし子」であることを認識し，コンテクストの自覚を持って読むこと，の二点が必要です。

第三の要件であがったこの二つの課題をメディア研究の観点から敷衍するのが，後半の主題です。それぞれを「テクスト概念の転回」，「コンテクストの主題化」に読み替えて，書物がいわゆる電子書籍に移行しつつある現在，そして未来の世界に相応しい「テクスト」および「コンテクスト」の概念の提出を目指します。

2．メディア論による補遺；三つの「テクスト」／「コンテクスト」

そもそもメディア研究とはどのような学問でしょうか。少なくともM・マクルーハンに始まる流れを汲むメディア研究（以下，メディア論）ならば，人文学とは極めて親和性が高いと言って間違いありません。

例えば，メディア論の学徒は，プラトンを思想的支柱の一つにしています。

『パイドロス』には文字をめぐる説話が出てきます。テウトエジプトの発明神のテウト（トト）が，知恵と記憶力を高めるものとしてエジプト王のタモスに文字を披露した場面は，文字という発明をめぐる最初のメディア論です。

タモスは，

> 書いたものを信頼して，ものを思い出すのに，自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり，自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになる（プラトン『パイドロス』134-135頁）

その場合の

> 知恵は，知恵の外見であって，真実の知恵ではない（プラトン『パイドロス』135頁）

として，文字への警戒感をあらわにします。この両者のやりとりは，あるメディアの登場が，人間が本来持つ機能を拡張するという立場と，逆に衰退を招くとする立場の対立ですが，メディア論は自覚的，かつ批判的にこの構図を継承する学問の一つです。

加えて，メディア論がプラトンに注目するのは，プラトンが文字というメディアの登場によって人々の思考や社会が大きく変わると考えていただけでなく，プラトン自身の思考が二つのメディアの間で揺れ動いているからです。例えば，『国家』では，文字の普及以前にあった口承時代のリテラシー（リテラシーという語自体が文字を使ったスキルを指すので，正確には，オラリティー）を代表する詩人を，文字が教育の中心になる理想の国家から追放することを宣言し，文字礼賛の立場を取っています。しかし，他の箇所では，次のように述べて，タモスよろしく，文字への警戒感をにじませます。例えば，『第二書簡』には「最大の予防策は，書き留めずに学び取っておくことです。なぜなら，書かれたものは世人の手に渡る運命を免れません」の記述が残り，『第七書簡』には「書かれてある事柄は，書いた本人にとって，いやしくも彼自身が紳士であるからには，なにも特に真剣な関心事ではなかったのであり，奥に真剣な関心事は，むしろ彼の内面の最も美しい領域に，どこにともなく置かれてあるのだ」との感情が吐露されています。

メディア論から眺めると，文字をめぐるプラトンのアンビバレンスは，新しいメディアの導入が引き起こす大きな社会変動の境界期，あるいはパラダイムの転換期に置かれた人々の反応を示したものと解釈できます。プラトンの立ち位置は，自らのことばを書き残さなかった師ソクラテス，テクストの講読を教育の中心に据えた弟子アリストテレスと対照させるとより一層際立つと言えるのではないでしょうか。

簡単ですが，以上からメディア論と人文学の親和性をご理解いただけたと思います。

では次に，メディア論が提案する「テクスト」および「コンテクスト」の概念の転回を見ていきましょう。

テクストの概念は三つに分節できます。

まず一つ目は，書物を指す概念です。書物＝テクストの考えには，書物の歴史性や，読書行為におけるテクストの効果についての観点が欠けています。いわば反省のなされていない即自的な状態のテクストです。

現在の一般通念としてのテクスト概念として，それ自体が考究の道具になることはありませんが，ここを出発点とすることで，以下に紹介する二つの概念の特長が明らかになります。

二つ目は，支持材料に依存するテクストの概念です。以下に見るようにアナール派の歴史学者R・シャルチエが出したテクストの概念です。

> 作者が書物を書かないというのは事実であり，彼らはテクストを書くのであって，それらが手で書かれたり，版刻されたり，印刷されたりして（今日ではコンピュータで処理されたりして）書かれたモノとなるのだ（シャルチエ，30-31頁）

> テクストの意味は，それらが読み手（または聴き手）によって受容・領有されるときに介在する形態に依存するものであると考えなければならない（シャルチエ，22頁）

一つ目の概念が極めて狭い時代の中でしか通用しないことは，テクストなるものが時代毎に様々な素材に支持され，その素材に相応しい体裁や生産様式に依存しながら発達してきたことから分かります。紙以外に石，竹，パピルス，羊皮紙などの素材があり，コデックス以外に竹簡，巻物の体裁があり，印刷以外に筆写の生産様式がありました。書物，そして未来のテクストも，この延長線上で議論できるわけです。

二つ目の意味でのテクストを，形態に依存するメッセージと言い換えれば，二つ目のテクスト概念はメディア論の学徒にとって非常になじみあるものになるはずです。この概念によって，テクスト＝書物の発想の狭隘が明らかになります。また，支持素材から自立したものとしてメッセージや

テクストを想定することの誤りも明らかになります。

三つ目は，生成されるテクストの概念です。Ｃ・Ｓ・パース，Ｒ・ヤコブソンの衣鉢を継ぐＭ・シルヴァスタイン，小山亘らが提唱する概念で，コミュニケーションにおける効果に着目したときに見えてくるテクストです。

> ここでいう「テクスト」は，コンテクストから区別されることで，我々に認識可能なものとして浮かび上がってくるもの，すなわち，理解・解釈や相互行為が織り成すものとしての「テクスト」を指し，いわゆる『書かれた作品』（書物や，そこに書かれている文，あるいは「なまの会話」及び，トランスクリプトのようなもの）などといった，〝text artifact〟とは異なることに留意されたい（小山，218 頁）

> テクストは，メッセージがコンテクスト（背景，グランド，地）から浮き立ち，コンテクストから区別されるフィギュール（フィギュア，図）となることによって，形成されるのである（小山，218 頁）

この概念の重要さは，テクストが，歴史，文化，環境，先行するテクスト，メディアなどをコンテクストとしてはじめて意味を持つことを指摘するとともに，テクストとコンテクストの動的な関係についてのイメージを提出したところにあります。

三つ目のテクストは，テクストの機能，または読書行為の効果に関するものです。この意味でのテクストは，古いコンテクストを図化させ，変容するメッセージ，すなわち詩的機能を持つものです。換言すると，コンテクストが地として図化したことは，ことばの詩的機能の指標となるわけです。そして，詩的機能を発揮したテクストは，先行するテクストとして，新たなコンテクストを創出する地となっていきます。

テクストとコンテクストは図と地のゲシュタルトの関係にあり，他方が地となることでもう片方を図化させます。読む行為とは，無限に循環する

関係をテクストとコンテクストの間につくりだすことを要件にしているわけです。

ま　と　め

一般通念のテクスト，あるいは所与のメッセージに対し，二つのテクスト概念が対置できました。第二のテクスト概念からは，形態，またはメディアに依存するメッセージの存在が，第三のテクスト概念からは，古いコンテクストを図化させ，変容する詩的機能を備えたメッセージの存在が垣間見えます。

以上二つのテクスト概念が，「悪しき文献学」の回避を念頭に，「良き文献学」に加えるべきものです。

「規範」や「古典」とされるテクストを読む際には，まずそれがメディアに依存していることに気づかなければなりませんし，「規範」的な読み方に取り込まれるのを避けるためには，テクストに求められる機能についての自覚がなければなりません。

歴史，文化，環境，先行するテクスト，メディアのすべてをコンテクストにテクストを精読することを，「良き文献学」の要件として提案します。

人文学にとって，書物の電子化は危機の一つとして捉えられています。しかし，書籍のみがテクストでないと考えれば，書籍の電子化をそれのみで恐れる必要はありません。また，電子化を恐れる理由の一つに，この技術が知を保存と伝達の対象，つまりデータに貶めることがあると思われます。しかし，テクストの機能に着目すれば，知の指標を手にするわけですから，電子化という形態の変化のみをいたずらに恐れる必要もなくなります。

以上が，『人文学概論』に触発されて，最近考えていることです。

引用・参照文献

シャルチエ，R.（長谷川輝夫訳）『書物の秩序』筑摩書房，1996 年（Chartier, Roger, *L'Ordre des livres, École des Études en Sciences Culturelles*, Tokyo, 1992.）

小山亘『記号の系譜』三元社，2008 年

プラトン（藤沢令夫訳）『パイドロス』岩波書店，1993 年

プラトン（水野有庸・長坂公一訳）『プラトン全集〈14〉エピノミス（法律後篇）・書簡集』岩波書店，1975 年

サイード，エドワード. W.（今沢紀子訳）『オリエンタリズム』平凡社，1991 年（Said, Edward. W., *Orientalism*, Georges Borchardt Inc. New York, 1978.）

Said, Edward. W., *Orientalism*, Vintage Book Edition, Vintage Books, New York, 1979.

柴田崇「マクルーハンによるヤコブソン理解のドグマ ── 通信モデルとの連続性と断絶」『新人文学』第 11 巻，北海学園大学大学院文学研究科，2014 年，92-147 頁

清水徹『書物について』岩波書店，2001 年

安酸敏眞『人文学概論 ── 新しい人文学の地平を求めて』知泉書館，2014 年